

六十五年目の残像

磯子区支部 市島 和子（子）

戦没者 高梨 三郎

戦没地 ニューギニア

私は遺児です。父の顔も覚えておりません。

親戚から戻してもらった数枚の写真で父親の若い時の存在を知り、出征時の顔を知ることが出来ました。父に抱かれた写真でしたが、そこには肌の温もりはありません。八月十五日が近づくとき、何時も思い出されることがあります。家を失った日のことです。私が三、四歳ぐらいだったでしょう。断片的に其の時の光景が私の中を過ります。残像として消えることなく、又薄れることなく、その部分は今もはっきりと思い出されます。きっと幼かった私にとっては、大きな恐ろしい体験だったのです。

私たちは羽田に住んで居りました。母ひとり子ひとりの家庭に近くに住んでいた伯父伯母が強制疎開にあい一緒に住むようになりました。一戸建ての小さな家ですが庭もあり小さな防空壕もありました。また玄關脇の小さなスペースには母の嫁入り道具のひとつである瀬戸の火鉢に当座必要な物を入れ埋めてありました。

ある日の夕方、近くの銭湯に行きました。着替えた服は明日洗うため木の盥たらいに水をはってつけておきました。私にはお気に入りの服だったように記憶しております。いつになく静かな夜でした。何事も無く夜が更けるはずでした。

その時、けたたましいサイレンの音と同時に家の中は真っ暗闇の停電です。私は庭に向かって物凄い勢いで這いずりました。何時もならそのまま庭の防空壕へ入るのですがその日は何時もと違っていました。母と伯母に手をひかれ、防空頭巾を被った私は六郷土手の方に逃げました。どの道をどのように通り抜けたかという記憶はありません。

気が付いた時には六郷川沿いの土手に掘られている防空壕を転々と移動しながら羽田空港に向かつて走っていました。途中六郷川の川面も道路も燃えていました。焼夷弾が炸裂し油に火がつき燃えているのです。その燃えている火を跨ぎながら逃げたことを今もかすかに覚えています。恐ろしい光景でした。空港内の防空壕は大きいものでした。大人も立って歩ける程でした。薄暗い闇の中でそう感じたのでしょうか。

そうした中で母の手からそっと大豆の炒り豆が渡されました。今思えば昔の人はすごいと思います。いざという時の為に簡単に食べられる非常食を常に用意していることです。それも食糧難の折にです。

空襲警報が解除されやっと思いで家に辿りつきました。でもそこには私たちの家がありませんでした。昨夜、盥につけておいた私の服が焼け焦げていました。一人残って消火活動をしていた伯父が家財道具を近くの土手に退避させたそうです。あげく全部盗まれてしまい、私たちは着

の身着のままの状態で焼け出されてしまいました。それから終戦の日迄は数年あったのでしょうか。

私たちは焼け出された家から少し離れた集合住宅で大人達が一台のラジオを前に正座し下を向いている姿もかすかに覚えています。

それが玉音放送だった事も大人になって判りました。

一九四五年八月十五日敗戦の日です。

戦況が厳しくなった折、周りの人々はどんどん疎開していましたが、私たちは残っていました。後に母から聞いた話ですが、母は父が戦地から戻って来た時にすぐに出征した地を離れる事が出来なかったと言っていました。

戦死の公報を受け、遺骨を受け取りに母と私の二人で行きました。小さな桐の箱の中には白木の位牌がありました。私が小学生の頃でした。夏の暑い日でした。芝増上寺の坂道が子供心にきつかった事を思い出します。そうした中で母の苦労は大変だったと思います。

徐々に日本の復興が始まりました。焼け野原だった土地はその面影すら見ることは出来ません。闇市だった所もきれいに区画整理され何々銀座に衣更え、現代は物が溢れ手に入らない物はない時代に昔の話をしても通じないのが当たり前。戦争があった事、大きな犠牲の上に現在があることをどう伝えていったらよいのか。風化させない為の行動が私たち遺族に課せられた課題なのかも知れません。

母は九十八才、アルツハイマー型認知症と診断されました。過去が薄れ行くなかで戦争の体験

話になると最後に決まって「さみしかった。」と言います。この言葉の重み、意味は体験者だけが解る言葉ではないだろうかと思います。

終戦記念日が近づくともメディアでは戦争に係わるドラマやドキュメンタリー、映画と集中的に目にします。これらの事も戦争を伝える意味では大きな役割を担っているのかもしれませんが。又私が書いている文章が人の心に響くことができるでしょうか。

いろいろな面で疑問を感じながら私の実際にあつた体験を綴ってみました。